

国立ハンセン病資料館語り部活動

平沢保治さん講演

小学生高学年編

2010年10月6日収録



1 ハンセン病はどんな病気か?

ハンセン病は昔むかしはらい病と言われていました。らい病の人は天がばちを与える“天けい病”“悪い心がけの人たちがなる病気”お父さんやお母さんが病気だと、その子どもたちも孫たちも病気になってしまう“血のけがれた遺伝病”と言われました。

でも今から137年前に、ノルウェーのえらいお医者さんが、ハンセンというお医者さんですけれど、病気の原因となる菌(きん)を発見しました。

菌が発見されたから、伝染病だと、人にうつる病気だということがわかりました。

でもお医者さんや社会の人たちは、今までの“悪い人がなる病気”血のつながりで起こる病気だという考え方をちゃんと直さないで、私たちにちょっと接しやすくするだけでも病気がうつってしまうと、こういうことを言いふらし、そのため、元気な人を守ってあげるんだということで、ハンセン病の人たちは、療(りょう)養所にいやでも押しこまれ、ふつうの病院のお医者さんでは、治療を受けられない法律が作られました。



ハンセン病の症状例

- 手足などの末しょう神経のマヒ
- 皮ふにさまざまな変化が起こりますなど

皮ふにさまざまな変化が起こります



昭和6年に作られた病予防法です



ハンセン病を引き起こす
らい菌のくわんび鏡写真です

解説

この法律こそが昭和6年に作られた癪予防法です。ハンセン病に感染したすべての人を、国が作った療養所に強制的に収容し、死ぬまで外に出さないという法律でした。

ハンセン病に感染すると、手足などの末しょう神経がマヒしたり、皮ふにさまざまな変化が起こったりします。

ハンセン病を引き起こす「らい菌」のくわんび鏡写真です。実際にらい菌は感染力が弱く、現代では治療法が確立していてすぐに治せる病気です。

これはハンセン病患(かん)者をなくそうという運動のポスターです。

当時ハンセン病はコレラやペストと同じような、おそろしい伝染病と考えられていました。そのため、患者たちを隔離(かくり)する無癪県運動(むらいけんうんどう)が、全国でさかんに行われたのです。

ハンセン病患者たちは大人も子どももまるで、犯罪者のように各地の療養所へ収容されていました。患者たちが収容された療養所は療養所といつても、治療は行いませんでした。また衛生状態も非常に悪いところでした。

療養所のまわりは高いかきねで囲まれていました。患者が簡単に逃げ出せないようにしたのです。収容された患者は仕事をさせられました。患者が患者のめんどうをみたのです。

食べるのも自分たちで作らなければなりませんでした。子どもも、目の見えない人でさえも働かされました。そのうえ、園が勝手に決めた規則を破るとばつを受けました。

これは処罰のためのかん房です。

平沢さんは14才でこうした療養所に入所しました。



2 全生園の生活

私は中学一年生の時に、この全生園に入院いたしました。今は子どもたちはだれもいないけれど、全生園には(平沢さんの入所した当時)80人近い子どもたちがいました。学校は昭和28年までは患者さんが先生をして、昭和6年に患者さんが建てた、全生学園というところで勉強をしました。子どもでも午前中は勉強して、午後からは仕事をする。こういう生活が



今は子どもたちはだれもいないけれど

続きました。私は小学校を卒業しているということで、園内の竹を使って、かごを作る仕事をしなさい、と言われました。

18畳(じょう)の部屋に10人以上の人たちが、共同で生活をし、ごはんを食べ、そして、当時は大風子油(たいふうしゆ)という痛い注射をして、“早く(病気が)良くなって外に帰りたい”。こう思って治療をしたわけです。

●解説

平沢さんが療養所に入ったころ、日本はアメリカや中国と戦争中でした。戦争が激しくなってくると、日本もこうげきを受けるようになります。被害(ひがい)を受ける療養所もありました。

3 入所の思い出

ちょうど戦争中、アメリカやイギリスと戦争をして、空襲も激しくなり、毎日のように爆撃機が飛んてきて、全生園の近くも爆撃で被害を受けました。

秋津町に爆弾が落とされて、多くの人たちがけがをしたり死んだと、そういう時だけ私たちはひいらぎのかきねから外に出されて、穴をうめたり(死んだ)人を片付けたりするのはいやだけれど、それでも“ひいらぎのかきねから外に出られる”。その喜びを感じて外に出て行きました。お礼にニンジンとかゴボウをいただいて、みんなで分けて食べました。

私はあの戦争中、人間の肉以外バッタでもヘビでも犬でもネコでも、カエルでも何でも食べて、生きて命をつないできました。よくそういう中を生きられたなと思いますけれどもやはり“病気を良くて外に帰りたい”“生まれた故郷に帰りたい”と、こういう思いがつらいこともよく服出来たのです。

●解説

戦争が終わってまもなく、ハンセン病の特効薬が日本にやってきました。プロミンという薬です。治療法がないと考えられていたハンセン病は、薬で治せるようになったのです。

しかし、治療法が見つかっても国はすぐには、薬を患者たちに与えようとしませんでした。そのため患者たちは、自分たちでお金を出して、薬を買うしかなかったのです。

また病気が治っても国は、回復者たちが療養所から出ることを認めませんでした。

4 特効薬 プロミンの出現

ハンセン病によく効く薬がアメリカで作られ、「プロミン」という薬が日本の薬屋さんの手で作られ、治療が始まりました。

病気が良くなるなら薬がほしい。でも国はそのお金をおしてくれない。そういう“ハンセン病の人は療養所で死んでもらう”。これが国の考え方であったからであります。

平沢さんもプロミンの薬をやってもらいたいと思った。私のお母さんは土地を売ってお金を送ってくれた。大変高い薬だった。私は早く良くなりたいと思った。今も両うでに青い注射のあとがあります。



5 自由と平等をもとめて

私はそういう中で、悪い法律をなくしたいと思った。私が入院した時は患者だけで1300人もいて、職員は50人くらいしかいなかった。

2010年現在 お医者さん20人をふくめて、入所者は276名で、職員は383人います。

そういう療養所にするために、いろいろな人と話し合い、そしてハンセン病に対する、まちがった考え方・偏(へん)見をなくし、そしてすべての人たちの心の中にある、差別をなくすために努力してまいりました。

●解説

ハンセン病が治る病気になったことで、全国の療養所では法律の改正や、生活の改善を求める運動が起こりました。平沢さんもこうした運動に積極的に参加したのです。

しかし隔離政策や患者に対する差別や偏見は、すぐにはなくなりませんでした。

地域の人たちからは、“全生園の人たちやハンセン病はこわい”。そう言って店に行っても、物を売ってもらえない時代もありました。

清瀬や久米川からタクシーに乗っても、全生園と言うと降ろされました。市役所へ行ってもいろいろと、外出証明書を求められ、お茶なども出してもらえなかった。

でも私たちは、うらみをうらみで返して、“あの人は悪い人だ”“だからやっつけちゃおう”とか、また相手も“あれにやっつけられたんだから、私も僕もやっつけでやろう”とか、そういう争いをしていては未来は開けない。許してあげる、ありがとうという思いが出来るのが、人間であります。

●解説

平沢さんたちが、周囲の理解を得るために続けた地道な活動は、平成8年らい予防法の廃止というかたちで実を結びました。しかし長過ぎたたたかいで、入所者たちは高れいとなり、社会復帰を果たせずにいます。

現在の多磨全生園です。多い時には1200人以上が暮らしていた全生園も、2010年現在、入所者は276人。平均年令は80才をこえています。

全生園ではハンセン病問題の歴史を伝えるため、入所者の生きた証をのこす活動をしています。

こちらの山吹舎は、かつての独身男性寮を復元したもので、つらい思い出のしみこんだこの場所も、今は人々のふれあいの場となりました。入所者である平沢さんも、子どもたちとの交流を大切にしています。



この部屋に私7人で生活してたんだよ、朝起きてね。布団をあそこに入れるの大変なの、押し入れがせまいから。



●解説

ハンセン病問題を正しく理解してほしいという願いをこめて、平沢さんは交流を続けています。

日本も、ハンセン病になる人は少なくなり、あなたたちが大人になるころには療養所はなくなっていくでしょう。その時に私たちは、生きるために開こんしたこの土地を、みなさんにのこしていきたい。

私たちは40年前から、この全生園にいろいろな木を植えて、われわれがいなくなったとき、みんなに遊んでもらったり、地球の緑は宝物だと、そう思って木を植え続けてきました。

今、3万本250種類、この大多数の木は、私たちがお金を出しあって植えた木です。ぜひみなさん方も、私たちがいなくなっても、この緑の森を守ってください。

全生園に入れられた病気の人たちは、社会からいじめを受け、きらわれ肉親にも会いに来てももらえない。でも私たちは、いつの日かハンセン病も病気だし治る時が来て、人間として認められる時があるだろうと、一生けんめいみんなに語りついできました。

人間が生きるということ、人が生きるということは人生、こうした命の染みこんでいるのが、この全生園の土地であり緑であり、そして死んでもふるさとに帰れない人たちが、となりの納骨堂には101年間の間に4084人の人たちが眠っています。

そういう苦しみにたえても、喜びを求め、光を求め、勇気を出して生きてきた、そういうほっこり高いところ、この全生園の中には染みこんでいます。

このハンセン病の財産 資料館をつくめ、納骨堂もつくめ山吹舎もつくめ、神社やあるいは望郷の丘(築山)もつくめて、ぜひハンセン病問題の正しい過去と現在を、自分のものとして学んでいただきたいと思います。



6

平沢さんへの質問

それでは、今まで全生園について、ハンセン病について、そして平沢さんについて学習してきた、直接質問をしてみたいという人に、質問をしてもらいたいと思います。

●平沢さんが全生園に入所した時のごはんは、どんなだったですか？

私が来た時はね、麦が60%、お米は40%。朝は患者さんが作った野菜のみそ汁だけ、昼はつけものだけ、夜は野菜を煮たおかずひとつだけです。白菜が出来る時は毎日白菜ばっかり



食わされました。じゃがいもが出来る時は、じゃがいもばっかり食わされました。たまごはお正月に1回だけ1個。肉もお正月に1回だけ食べる。こういう食事でした。ハンセン病はねやはり、おいしいものを食べて、からだを安静にしてそして病気を治すのに、まずいものを食べさせられて(栄養のないもの)、それで厳しい休みのない仕事をさせられたから、みんな病気を悪くしました。

9月28日が開園記念日で、毎月、麦のごはんじゃなく、28日にはうどんをゆでて、みんなに食べさせたんです。その当時はうどんが大変おいしかったです。また、おなかが空いた時さつまいものゆでたのを、本当にみんなでおいしく食べました。

今、2階の展示室に全生園の昔の写真があるけれども、松舎っていう少年寮があつて写っています。まだ学校もなかった時代に、そこの松舎は1棟に4部屋あって、山吹舎は4つ部屋があるでしょう。4つ部屋があつて、山吹舎は12畳半だったけれど、子どもの部屋は18畳の部屋が4つあつて、それで1号室にりょう父さんがいて、いろいろと面倒をみてくれたり、相談にのってくれたりした。山吹舎と同じように4部屋でした。

●ひいらぎが2メートルもあり、逃げたらかん房に入れられることを知っていても、全生園から逃げ出そうと思ったことはありますか？

あります。やはり無断で、この近くは全部雑木林の山だったんだよ。今、家がいっぱいあるけど。そこにね、くりとかきのこと取りに行って、そしてみんなで食べたりしました。でも見つかったらかん房に入れられるから、みんなで見つからないようにして、“出られない”“行けない”っていうところは、行ってみたいと思いますから、病院がいやで逃げ出す人もいっぱいいました。

●全生園に入っている時に、仲の良い友だちはいましたか？

はい、いました。すもうとったり、野球をやったり、そして勉強したり仕事をしたり、仲良いい友だちが大勢いました。友だちのおかげで私は、今日までこうしてあきらめないで生きてこれたと思います。

●平沢さんが全生園で一番好きな場所はどこですか？

やはり望郷の丘です。あそこは私の子ども時代から、さみしい時も、苦しい時も、悲しい時も、うれしい時もあの丘に登って、自分の心を安らかにした場所だからです。望郷の丘はね、大正11年ごろ、当時はひいらぎのかきねじなくて、板のかきねだったんです。板のへいがあって、その外へ逃げていけないように、2メートルくらいの穴を掘らされた。

それでその土を、外に行けないんだったらこの土で、丘を作て外をながめたらどうかということで、私たちの先輩が3年がかりで作った。高さは約10メートルあります。今は木が大き



いけれど、昔は掘った土と周りの土を集めて、中にはからだが弱くて土をもっこでかつげない人は、みかん箱に土を入れたり、バケツに土を入れたりして運んだ。

だから望郷の丘は、私たちの全生園の先駆たちの、血と涙で築き上げられた丘です。それで丘を作つて、外をながめるようになって、だれが言い始めるでもなく、望郷の丘という名前がついた。作るのに3年間かかったんです。

●望郷の丘から故郷をながめる時、どんな気持ちでしたか？

やはり“帰りたいなあ”“友だちはどうしてるんだろう”“お母さんやおばあちゃんたちは、どうしてるんだろう”など、今は木がいっぱいいで外は見えないけれど、昔は富士山もこっちのほうに見えたしね。それから東北のほうには私の、ふるさとの、筑波山も見えたし、西のほうからずっと秩父の山々もよく見えたんです。特に冬は、ここはからかぜといって、風が吹くから空がすみわたって、そして今の所沢街道を、お百姓さんが車を引いたりして通るのがながめられた。自分も早くそこを歩きたいなあとう思いました。

●平沢さんは木を植える時に、どんな木を植えたんですか？

最初は、すぐ育つひのき、松、来る時にサクラがあったでしょう。あのサクラは、昭和30年に私が植えた、サクラの木なんです。55年経ってるんです。だからそのとき生まれた子は55才になってるの、校長先生がまだ子どもの時代、まだ生まれていない時に植えたサクラ、でも当時はみんな、花が咲いても見に来てくれなかった。全生園のサクラ(見に)行くと病気が怖いって言って、今はもう日曜土曜になると、3000人も5000人も見に来て、われわれが花見も出来ないほど、全生園には約500本のソメイヨシノっていうサクラとか、サクラでも十何種類のサクラがあります。シダレザクラとかハマザクラとかボタンザクラだと、ヤマザクラだとそういうサクラが沢山あります。

●何才の時が一番幸せでしたか？

むずかしい話だな。やっぱり少年から青年時代 からだも元気だったし、野球をやったりかごを作ったり、なんでも出来たからね。やっぱり10代の後半から20代にかけてで、目的があったから、どんなことがあっても、ふるさとへ帰るんだっていう、そういう願いが強かったから、それに向かって毎日毎日、つらさをたえて、幸せに日々を送りました。

だからハンセン病になって、いろいろいじめを受けたり、いまだに公然と生まれた家には帰れません。でも私の生まれ故郷の母校の子どもたちは、毎年のように“来てください”と言ってくれる。そういうことが他の人は出来ないけれど、私には出来るということで、それもみなさん方、そして私の友だち、先生方、多くの人たちが私を支えはげましてくれたから、そういうことが出来ると思って、常に感謝の気持ちを持っていました。

●今までどんな所に行きましたか？

世界の国々は11か国行きました。ソビエト(当時)デンマーク・ドイツ・フランス・スペイン・旧ユーゴスラビアの3国・インド・中国・韓国・ハワイ・アメリカ。日本でも全然行っていないところは、徳島県と佐賀県の2つだけです。あとはおかげさまで行かせていただきました。

さっき言ったように、ハンセン病になって、からだが不自由になって、年を取っていても、一生けんめい生きていれば、みなさんが“来てほしい”と言って、呼んでくれるので大変ありがたいと思っています。

今一番成しとげたいことは、私たちが植えた緑が、私たちがいなくなった時、切り倒されて、家が建てられたりしないように。そういうことと、数多くのみなさん方のような子どもたちに、年を取っても会えるように、からだに気をつけていきたいなと思っています。

●平沢さんの考えは今と昔でどう違いますか？

同じです。でもねやはり、常に自分とたたかっているんです。人間ですから弱気になる時もあるけれど、そうした考え方を前向きにさせてくれたのは、くり返して言うけれども、一年に何千人と会ってくださる人たちのおかげです。

特に小学校の児童さんが私は主力です。小学生のみさんが大好きなんです。よく聞いてくれるし、よく勉強してくれるし、よく行動してくれるから。中学生とか高校生も勉強などをしてくれるんですけど、小学生の人たちが一番まじめにやってくれるから、大好きです。

●これからぼくたちにやってほしいことはありますか？

ひとつは自分を大切にすること。自分を大切にすることは、他の人を大切にすること。そういうことが出来ることによって、ハンセン病の人たちや、ハンディキャップを持つている障害者や、おとしよりの人たちを大事に出来る。

特にハンセン病のことについては、正しい医学的なハンセン病のことを勉強して、まちがった考え方の人たちに教えてあげてほしい。ぜひ全生園に遊びに来て、資料館にも来て、ハンセン病の人たちがどう生きたのか、そしてどういう状況だったのかということを、知っていただけるように力を貸していただければ、大変うれしいです。

7 みなさんへのメッセージ

多くのみなさんが、勉強して質問をしてくれて、大変うれしく思います。

命というのは平和でなければならぬ。ケンカしてちゃダメ、だからみんな仲良くすること。そして、自分がなんらかの形で、社会や他の人たちに役立つような、人間になれるようにしてほしい。そのことがハンセン病で苦しんだ私たちが、みなさんに送るメッセージであります。

どうも ありがとうございました。

発行日 2011年2月25日

編著・発行 国立ハンセン病資料館

協力 平沢保治・當摩彰子・佐久間建